**説教20221224ルカ2：8-20「幻がなければ」招きの言葉　箴言29：18a　幻がなければ民は堕落する。**

**私たちは今、イエス様の誕生をお祝いする為に、この会堂に集められています。クリスマスとは、イエス様がお生まれになって、私たちの処へ来て下さったことを記念しお祝いするお祭りのことであります。私たちは、今この場所で、天にいます主イエス様に心を向けて、感謝と賛美の礼拝を捧げて参りたいと願います。**

**クリスマス・ファンタジア、これは、今日、別府の街で開かれているお祭りの名前です。クリスマス・ファンタジアと聞いて、何か皆さん心がワクワクさせられるのでしょうか。まあ、ワクワクしなければお祭りが盛り上がりませんので、なんだかこんな感じのネーミングになったという感じでしょうか。**

**クリスマスと言えば、プレゼントがもらえる。ファンタジアと言えば、素晴らしい世界の到来を、幻として思い描いている。こういう感じでしょうか。**

**プレゼントと、実は、このことは、この聖書の中心に位置する、重要なテーマです。イエス様は、私達に大きな喜びをプレゼントして下さいます。時には乳飲み子をプレゼントして下さる場合もあるでしょう。プレゼントと言うのは、言うまでもなく駆け引きやギブアンドテイクではありません。イエス様が、与えたいと思われるから、それをお与えになるのです。**

**そしてファンタジアということも幻という意味では、聖書の中心的なテーマなのです。今、別府の街の夜空に花火は見えていませんが、私達はまもなくこの夜空に花火が打ち上げられる姿を想像できるでしょう。私たちは今、幻として、将来の花火の姿を見ることが出来るのです。**

**聖書にかかれている、幻とは何でしょうか。それは、私達が最後の最後に、神様であるイエス様と共に暮らすようになるという幻であります。**

**今日、母マリアと父ダビデの間に、イエス様が乳飲み子として与えられ、この父と母と子は、この地上で共に生活をする家族とされました。しかし、御子イエス様は、３０歳位の時にこの家族を離れて、伝道の旅へ出て、やがて十字架に掛けられて死なれました。ところが、天にいます父なる神様は、御子イエス様が死なれたままであることをあり得ないこととして、イエス様にもう一度命をお与えになって、イエス様の身体を天に上げられたのでした。それは滅びることがない命の体でした。私達人間も、イエス様のことを信じて、イエス様について行けば、イエス様と同じように、滅びない命が与えられるのです。このことが聖書に書かれています、大きな大きな幻なのです。この幻は、夜空に描かれる花火の美しさや壮大さにはるかに勝る、この上ない大きな喜びを私たち人間に与えてくれる幻なのです。**

**私たちが最後の最後に、イエス様と共に暮らすようになるという幻の生活とは一体どういうものなのでしょうか。そのことも、聖書に次の様に記されています。**

**（イザヤ書/ 11章 06節）**

**はと共に宿り　は子と共に伏す。子牛はと共に育ち／小さい子供がそれらを導く。**

**（イザヤ書/ 65章 25節）**

**狼と小羊は共に草をはみ／獅子は牛のようにわらを食べ、蛇は塵を食べ物とし／わたしの聖なる山のどこにおいても／害することも滅ぼすこともない、と主は言われる。**

**小さい子供、小羊、子ヤギ、子牛、こういった者たちは皆、力が弱くて、保護を必要とする存在です。一方で、狼、豹、わかじじ、ヘビたちは、皆、攻撃的で、時には相手をかみ殺すような凶暴な存在です。この相いれないような二つの存在も、最後の最後に実現する幻の世界においては、共に草をはみ、共に宿り、共に育ち、害することも滅ぼし合うこともなくなる、と記されています。つまり、この幻の世界では、人間も家畜も野獣も、全ての生き物が仲のよい家族とされるということです。**

**これを聞いて皆さんそんなことはあり得ないこと、と思われるかも知れませんが、この幻は確かに人間の業ではできないことであります。この幻を実現できるのは、私達と共に歩んで下さる神様であるイエス様ただお一人なのです。**

**言い換えますと、この聖書に書かれています大きな幻とは、私達人間が思い描く幻ではなくて、神様であるイエス様が思い描いている幻なのです。私たちは、今は目には見えないイエス様を信じて、彼について行けば、その大きな幻の世界に、遂には入れられることになるのです。**

**さて、イエス様を中心にして、この様に完成されつつある家族は、神の家族ともよばれます。洗礼を受けた者は、神の家族として兄弟姉妹と呼ばれます。この世における神の家族は、最後の最後に完成される神の家族の完成した姿を、今この時に、幻としてみることが出来るのです。**

**この世にあって、家族の意味合いは時代に連れて大きく変化をしてきました。実は私たちはその変化するということをあまり理解していません。現代に生きる私たちは、今の社会で実現している核家族、すなわち血のつながった父と母と子どもを中心として家庭を作って、そのつながりの中で生涯を全うするのだ、と言うことを常識として受け入れて、その通り各々の人生を送ろうとしてきました。血のつながった父と母と子どもを中心とした集団が家族である。実は、この定義は、明治時代に、政府が家制度を形作るにあたって、生み出されたものでした。それ以前の、江戸時代には、一部の武士階級を除いては、家族の繋がりはもっと隣り人に対して、広がりのある緩やかなものであったようです。（中村吉三郎「近代化と天皇制」）つまり、農家でいえば、隣りの家の子どもを何らかの事情で引き取って、共に生活をするようになれば、その子供も、血のつながりがあるなしに関わらず家族の一員となったということです。又、商売の家でいえば、長年丁稚奉公して来た徒弟は、血のつながりがあるなしに関わらず、もはや家族の一員であったことでしょう。**

**私達が今に共有している家族制度は、明治時代に一部の武士階級の家制度を見習って、造られたものであり、そのあまりに血のつながりを重視する仕方に、今や多くの御家族が悲鳴を上げているのが、残念ながら今の社会の実情でありましょう。**

**今、猫を家族の様にかわいがって、猫と共に暮らしておられる方も多いです。そしてその方にとりましては、そのネコは、家族の様ではなくて、もはや家族の一員なのです。**

**この様に見ていきますと、私たちは、今や、将来に向かって、新しい家族像の幻を思い描くべき時代に差し掛かっているように思われます。**

**さて、聖書に記されている家族の幻の姿は、今迄申し上げてきましたが、今日読まれましたルカ福音書の箇所にもその家族像が具体的に記されています。**

**ルカ福音書２章１６節**

**そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。**

**４日前に、私は杵築教会の付属の幼稚園のクリスマス会に急遽呼ばれて、イエス様が飼い葉おけの中でお生まれになったという降誕劇を見てきました。前日の夜に保育士さんから御招きの御電話をいただいたのですが、私がその降誕劇に呼ばれた次第も、何かこの羊飼いたちが天使たちに導かれて、乳飲み子イエスを探し当てた次第に似ているなあと思いました。何で部外者とも言える私がこの幼稚園の降誕劇に急遽招かれたかと言いますと、具体的には、この幼稚園の保育士さん達が、少子化で存亡の危機に立たされているこの幼稚園の降誕劇を私にも見て、その喜びを是非味わってほしいと熱く願われたからであります。**

**聖書を読むとき、私達は、うっかりすると、そこに記されています神様の大きな喜びのを、誤って読んでしまう場合があります。飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子イエスを探し当てた羊飼いたちは、何に喜んだのでしょうか。それは、父なる神が、自分たちに神の子をお与えになられたということです。今迄、野宿をしながら羊の番を夜通ししていた、この羊飼いたちは救いを求めていました。現実の生活に救いがない彼らは、天にいます父なる神に向かって、毎日毎日救いを求め続けていたのでした。そして、そんな彼らの姿を見て、父なる神は、彼らにお応えになって、神の一人子イエス様を彼らにお与えになったのでした。この出来事は、羊飼いたちに、自分たちも神の子となる事が出来るという幻を与えてくれたのでした。ところで、この羊飼いたちと、マリア・ヨセフ・イエスの家族には、血のつながりはありません。彼らを結びつけたのは、血のつながりによらず、ただ救い主イエスキリストを信じる信仰によってだったのでした。つまり、主イエスキリストを信じれば、私たちは、初めは部外者であると思われていたのが、その信仰によって神の家族の一員にされる幻に生きるようにされるということなのです。**

**教会もこの世の中の影響を大いに受けて、この個所を次の様に読む場合が多いのです。この飼い葉おけに寝かされた寄る辺ない乳飲み子イエスを、ヨセフとマリアが育てたように、私も、そのように一生懸命、我が子を産み育てて子育てして愛情に満ちた家族を実現しようと。**

**この読みも、決して間違いではありませんし、家族が神の愛に満たされて平和になることのもとになることでしょう。しかし、聖書が言いたいことは、これだけに留まるのではありません。それは、今の核家族の中に制限されるような喜びではなくて、血がつながっていようがいまいが、或いは初めは部外者であっても、全ての隣り人達に広く開かれた、神の家族となる大きな喜びなのです。**

**主イエスが、今、私達に語っておられるのは、新しい神の家族の幻であります。私たちは、主イエスにしかできない、この神の家族の形成と言う業を、素直に信じて、又新たな一年を、神の家族を迎え入れる大きな喜びの内に日々を過ごして参りたいと願います。**